

Title	昭和三十二年度 山形・仙台方面史學科秋季見學旅行記
Sub Title	
Author	長, 祥隆
Publisher	三田史学会
Publication year	1958
Jtitle	史学 Vol.30, No.4 (1958. 3) ,p.137(555)- 141(559)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19580300-0137">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19580300-0137</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

は他に殆んどその比をみない。

戦後の日本史研究はまことに目覺しいものがあるが、思想史の分野では必ずしも實り豊かであるとはいひ得ない現状である。その意味で新しい空氣に觸れたものではないが、この思想史學の先達が遺されたノートの整理刊行には量り知れぬ意義があらう。更に續刊を期待したい。

(太田次男)

## 彙報

昭和三十二年度

### 山形・仙台方面史學科秋季見學旅行記

十月十五日（火）先發の若干名を除いて大部分は二十二時三十分上野發の列車で出發した。集合の場所は山形市から程遠くない慈恩寺である。

十六日九時少々前山形驛着、直ちに左澤線に乗り換え最初の目的地へと向う。車窓からの眺めは別に異を立てる程のものもなかつたが、ただ刈った稻を東京近郊のように束ね穂を下にして、横に長く支えられた丸太に垣根のようにつける所謂稻掛けと違つて、圓錐形に高く積み上げられているのが異様であった。この稻積は俗に「にほ」と呼ばれている。後刻伊木先生から「ベンギン

の立てる姿やにほの波」の一匁を拜聽した。羽前高松で再び電車に乗り換え白岩に着く。そこから寒河江川を渡り慈恩寺に至る。ここで先發の指導の伊木、淺子、河北の諸先生、西洋史の森岡先生、先輩學生と合流して見學の途についたわけである。

さて慈恩寺は寒河江川の河段丘に建ち、寺傳によれば神龜年間の創建といわれる古刹で、その本堂（彌勒堂）は檀那最上義俊、普請奉行安齊主計正、大工大友雅樂助による元和四年の再建である。桁行七間梁間五間、單層入母屋造りの堂々たる建築で、細部の繪様彫刻等に桃山時代の特徴を有し、現在重要文化財に指定されている。本堂の東側にある阿彌陀堂には木造阿彌陀如來坐像が安置されている。像高一尺七寸二分、檜の寄木造り、漆箔塗りで形相圓滿、藤原時代の特徴を有する優作で同じく重要文化財に指定されている。本堂の西には文政十三年の建築にかかる三重塔がある。因に同寺の執事花山祐憲師から寺史その他について興味深い説明をいただいた。

慈恩寺を辭してバスで谷地、寒河江を経て山形に出、各自晝食後、市内七町にある專称寺に集合見學した。本寺は慶長元年に最上義光がその女阿今の方のために村山郡高齋村から山形仁王堂小路に移建し、後現在の地に再び移されたもので、現堂宇は元祿十三年の建築である。ここで本寺の開基本願寺光佐（顯如上人）の裏書きのある「親鸞上人繪傳」四幅をはじめ同開基筆の十字名號、

開基の畫像、阿今の方の畫像などを拜見した。

專称寺から夕闇の迫る道を山形大學へ急ぎ、そこで庶民資料を見せていただく。檢地帖など特に興味深かつた。また現在尾花澤附近は紅花の主產地であるが、これに關する史料も多かつた。芭蕉の「奥の細道」に出てくる鈴木清風はこの地の有力な紅花問屋であり、また大地主でもあつた。

清風が如何に大富豪であつたかは、上、山藩主松平大和守直矩が鈴木家から借りた金子四千余兩の借用證によつても知られる。

預申金銀之事

合金四千百八拾兩貳步と銀五匁三分一厘

右者大和守殿爲要用借請候金子此度無利十年賦濟ニ相定候所實證也  
從當辰暮定之通元入壹割宛無滯急度返濟可申候其内如何様之差  
問出來候共相違申間鋪候仍證文如件

正徳二年辰正月

辻園右衛門印  
堀江孫左衛門印  
黒川孫兵衛印  
笛田郷左衛門印

右之通相違有之間鋪也

早川清士印

山形大學を急ぎ辭してバスで宿泊地天童へ向つた。天童は織田氏二萬石の城下で、將棋の駒の產地として名高く、これは藩祖が祿高少なく、士分以下輕輩の生活補助のため、内職として獎勵したのに基くといふ。天童温泉は田甫の中に開けた風情のないものであるが、夜行に疲れた身體を休めるには十分であった。

翌十七日は前日とは打つて變つて、朝から小雨のパラつく悪天候であったが、予定通りまづバスで山寺へまわった。山寺立石寺

白井兵庫印  
好田内記印  
堀平藏印  
小河原武太夫印  
早川茂左衛門印  
鈴木八右衛門殿  
好田内記印  
堀平藏印  
小河原武太夫印  
早川茂左衛門印  
龍判形不審治不

は寶珠山の山腹にあって、貞觀二年慈覺大師の開基と傳え、古來比叡山延暦寺の別院として東北における天臺宗の大寺院であった。根本中堂は天正年間斯波兼續の再建で、内部の裝飾手法などに多少桃山期の特徴を示しているが、概して粗大な建築である。

ただ内部は前方二間を外陣とし後方を内陣とし、その區別を嚴にしているのは天臺佛堂の古式を傳えるものとして興味がある。内

陣には文字通り開基慈覺大師以來の法燈が燃え續けていた。右脇の間安置の傳教大師の木像は秀作、また向拜にかかっている鰐口は、慶長十三年に源光直が最上義光のために寄進したものである。

根本中堂から西へ清和天皇の供養塔、日枝神社、念佛堂、鐘樓を経て蟬塚に至る。これは壺中なる俳人が芭蕉の「しづかさや岩にしみ入る蟬の聲」を石に刻したものである。仁王門から奥院に詣で、引返して本坊で寶物を拜観した。藤原時代の木造大日如來坐像、推古式の金銅觀世音菩薩立像、日本三印の一つといわれてゐる「立石倉印」の印文のある銅印一顆などが主なものであった。ただ如法經所碑と慈覺大師像を見ることができなかつたのはまことに殘念である。

さて前者は平安末期天養元年（一一四四）僧大阿大德が、同志と法華經一部八卷を書寫し、これを靈窟に奉納して、自他の幸福、極樂往生及び佛教の弘通を祈つた由を記したもので、埋經といわれるこの種の信仰は平安時代に盛んに行われたもので、藤原道長

が大和の金峰山に納めた金銅製の經筒は最も有名である。なお後者は昭和二十四年に古くから慈覺大師の墓と傳えられている洞窟の中から幾つかの人骨とともに發見された平安初期のものである。

晝食後仙山線で仙臺に向つた。面白山トンネルの紅葉が美しかった。

一時間余りで仙臺に到着直ちに大崎八幡を見學した。大崎八幡は伊達政宗が慶長九年に造營をはじめ、同十二年に落成した所謂權現造の最古のもので、松島の瑞巖寺とともに東北地方における桃山建築の双璧である。拜殿は七間三面、本殿は五間三面、ともに單層入母屋造柿葺で、拜殿と本殿は合の間によつてつながれ、拜殿の前面には千鳥破風、向拜及び軒唐破風をつけ、平面頗る複雑で變化に富み、しかも曲線の配合よく諧調の美を見せてゐる。細部は到るところに雄渾な繪様彫刻を施し、枠組の間、幕股の内部などにも彫刻をおいてゐる。社殿は内外ともに臘色塗とし、燐然たる金具や各種の極彩色と相映じて華麗を極め、桃山期の豪華さを遺憾なく發揮している。

社殿に隣接して、もとその別當であった龍寶寺がある。その本尊釋迦如來像を拜した。像は所謂清涼寺式の優作で、像高約五尺、右手は說法印、左手は與願印を結んでゐる。東北地方にはこのほかに福島縣喜多方市、山形市にそれぞれ一體ずつを藏し、この三

者は互に様式手法に類似點の多いのは興味深い。なお本像は現在までのところ清涼寺式釋迦如來像分布の北限になつてゐる。

ここからまた仙臺驛にもどり仙石線で鹽釜へ出て宿泊した。生憎風は強く、寒さまた厳しく寢ざめ勝ちだった。

十八日まず鹽釜神社へ詣つた。社殿は元祿八年伊達綱村が造營をはじめ、寶永元年吉村の時に完成した。社前には伊達周宗寄進の燈籠、林子平の獻納の日時計などがある。當社は江戸時代には伊達氏の崇敬篤く、社領二千二百余石を食み、社運盛んなるものがあつた。

御釜神社は鹽釜神社の攝社で、玉垣内に鐵製の大釜が四個ある。口徑は何れも約一米で、往古鹽土老翁が鹽を煮るために使用したものと傳えて いる。

御釜神社から松島に出て雄島から見學した。雄島は俗塵を離れた幽邃境で、僧徒の修練に最適の地であった。岩壁には石窟多く、そこに佛像、卒塔婆の形が彫刻されている。有名な賴賢碑はこの島にある。これは老師を慕う子弟が徳治二年に建てたもので高さ約一丈、碑の形式は中國式で、上方に題字を刻し、下方に龍と雷文の輪廓を施した中に、師の行徳を草體の細字で記している。碑文は當時書道に名高かつた元僧寧一山の自撰自書で、特に草體で記されているのが珍しい。

雄島から觀瀾亭へまわった。これは政宗が秀吉から賜つた伏見

桃山城の一字を江戸藩邸に移したもので、忠宗の代になつてさらここに移建したものといわれ、桁行八間、梁間四間の書院造で、奥の間の襖及び壁には金地に華麗な樹木草花が描かれ、その筆者は狩野山樂と傳えられている。

瑞嚴寺はもと圓福寺と稱し、鎌倉時代法身禪師の開山で、奥州名代の禪林であつたが、後荒廢したのを、政宗が再興して慶長十四年竣工したもので、寺號もその時今の名に改められて伊達家の菩提寺となつた。本堂は一に大方丈と稱し、全く書院の形式に成り、桁行十三間、梁間九間、單層本瓦葺の大宇である。その室内は繪様彫刻極彩色を施し、左右襖の畫は狩野、長谷川等の諸派の作と稱せられ、所謂金碧畫で華麗を極めている。東北地方における代表的な桃山建築である。玄間は三間六面で、乙字形をなし、屋根は入母屋造で千鳥破風をつけ、前面には雄大な軒唐破風を載せ、組物は二手先を用い、圓柱に礎盤を置き、壁は白壁、隨所に華頭窓を開き、内部は床は總土敷、天井は格天井で、隨所に繪様彫刻あり、唐様建築の精髄を發揮し、當時の建築中での傑作である。

瑞嚴寺と並んで伊達家の靈廟圓通院がある。

最後に五大明王像を安置する五大島を見學した。現在の建築は慶長年間政宗の再興にかかり、三間三面單層屋根寶形造本瓦葺、正面一間の向拜があり、軒は一重繁檼二手先組物を用い、枑組の間に十二支獸を刻した棊股を配し、腰に廻様を廻らしている。本

堂はよく周囲の勝景と調和して美しい好建築である。

ここで全日程を終り、三時頃無事解散した。

今回の見学旅行に際し、格別の便宜を與えられた社寺、學校關係の當事者の方々、塾員の方々に心からの感謝を意を表する次第である。(長祥隆記)

## 第五回早慶連合史學會

恒例の早慶連合史學會第五回大會を昭和三十二年十二月七日午前九時三十分から早稻田大學文科系大學院小野梓先生記念講堂で開催した。研究發表者及びその題名は次の如くである。

南朝租稅制度の特徵

古賀 登氏(早)

宮崎 武三氏(慶)

アテナイの在留外人

ハーバート・バタフイールドの見たアクトン史學

一歴史に於ける道徳的判断の問題を中心にして

榮田 卓弘氏(早)

奈良時代に於ける宇佐八幡の託宣について

佐志 傳氏(慶)

公開講演(午後一時半より)

竹田 龍兒氏(慶)

小松 芳喬氏(早)

門閥としての弘農楊氏について

鈴木 覚君

地方史研究とイギリス經濟史學

會終了後、大隈會館にて懇親會が催され多數の出席をみた。なほ當日、大隈記念室、初期日英外交史資料の展覽が行われた。

## 第四五〇回三田史學會例會

昭和三十二年十二月十七日 於七番教室  
慶應義塾の最初の外人教師履入れについて 會田 倉吉氏

## 第四五一回例會 卒業論文發表會

一月二十四日 於二十三番教室  
二十五日 於 一番教室

西洋史專攻

アメリカ初期における選民意識

大矢 寛治君

イギリスにおけるいわゆる「初期産業革命」について

平松 茂雄君

十七・八世紀イギリスにおける纖維技術革命について

内海 彪君

ワイマール共和國におけるインフレーションの問題

一岡 利隆君

イギリスにおける工場法の歴史——捺染工場、染色漂白工場

レース工場について——